

「研修会等名称」

平成 19 年度 F D 推進会議（専任教職員向け）～ F D のリーダー育成に向けて～

場所：上智大学四谷キャンパス
期間：平成 19 年 6 月 30 日（土）

平成 19 年度 F D 推進会議（専任教職員向け）に出席した。

開会挨拶のなかで、松本亮三氏（東海大学付属図書館長）が、この会は F D のリーダー育成を目的としますとぶちあげた。私としては、そのような意識で参加した訳でもないが、本会議がそれを目的とすることは次の基調講演からも明らかだった。

基調講演は圓月勝博氏（同志社大学教務部長）が行った。F D の組織的取り組みを目指して取り組みを題しての講演は、これまでの私立大学における F D 活動全体を理解する上できわめて有益であった。それによると、1990 年代の中頃から行われるようになった。最初は恐らく自主的活動であったに違いない。しかし、現在はそうではない。2005 年にすでに大学院において F D は義務化され、2008 年には大学（学部）においても義務化されることである。この動きをみると、文部科学省のかねてからの意図が明らかになったように思われた。私は少し前から、本来的な意味での F D と現実に行われている F D 活動にかなりの乖離があると感じていた。現実に行われている F D とはもちろん授業評価である。文部科学省はこれまで大学や学部の設置の認可において大学行政を牛耳っていたが、それを自己責任ということで、その面における指導を諦めた感がある。そこで出て来たのが授業評価であろう。授業評価だけでは余りにも狭すぎる概念である。そこで F D が登場する。

F D の現状と課題ということで述べられた点は、「個人的な F D と組織的な F D」の違いである。個人的な F D ではノウハウが共有されず効率が悪い。また、継続性が担保されないのが安定性がないというのである。これはそうに違いない。そして、この会議では、組織的な F D を阻止しようとする個人的 F D 主義者を押さえ込むテクニックや戦略にまで言及してくれた。その議論のなかで、「深海魚」ということばが使われ唖然とした。どの大学にもこのような活動に不向きな教授はいる。深海魚は暗い研究室で一人寂しく生きる人達である。それだけではない。深海魚が F D のような活動のなかに巻き込まれ水面に上がると、パンクしてしまうというのである。この言葉は、現在の F D 活動が目指すものを如実に表現している。

本会議にいわゆるエリート大学の教職員は出席していない。参加する大学は、かなり片寄りがある。F D 活動を本格的に進めないと潰れるかもしれない中堅の大学である。このため、本会議はいくつかの大学にとっては生き残りをかけた活動の一環である。ある大学では、F D 委員会の長は学長で、委員は学部長である。他の大学は、その大学だけで 10 人もの先生方が出席していた。この会議は政治的であると同時に、きわめて経営的なものであることを実感せざるをえない。

2 時半よりグループに分かれ、2 時間に互って議論が交わされた。私の参加したグループでは、自己紹介の後、それぞれの大学における F D の問題点などを出しあった。このような会議ではなかなか意見が出ないと思っていたら、そうではない。グループ討議の出席者は、滔々と自分について、自分がこれまで F D 活動で取り組んできたことを話した。これは決して一人ではない。何人かの先生方がそうであった。聞く者としては辟易する。この F D 推進会議出席者は、すでにリーダーだと自認している人達であり、大学運営の中枢にいと自負する人達である。その議論の中で私として 1 つ参考になったことがある。10 余りの大学の中で授業評価アンケートを記名式に変更したという大学が 2 つもあった。もちろん、学生へのフィードバックという面を考えてのことである。

2 . 研修の成果

3 . 授業への研修成果の反映状況

| 学 部 長 | F D 委 員 長 | F D 委 員 会 | 企 画 ・ 広 報 課 長 | 係 |
|-------|-----------|-----------|---------------|---|
| | | | | |